唐代小説作者の異界に対する認識

――『玄怪録』とその続書を例として――

唐　鈺

中国人の異界に対する探求は絶えずに続いてきたが、それがはじめて大規模に文学に出現したのは六朝志怪小説である。ただし、六朝志怪小説に百篇くらいの異界を含む物語があるものの、大部分は短いため、異界に対する描写は少ない。しかし、唐代になると、文字数が多くなる伝奇小説という新しい小説ジャンルの誕生とともに、異界に対する描写も詳しくなった。それらの描写を通して、その時代の人の異界に対する認識を明らかにすることができる。

また、中国古代の人の異界に対する関心は、往々にして現実主義と交わる。その結果、異界そのものではなく、現実世界の人と異界との関係に対して興味を持つようになる。その体現として、中国古典小説中の異界物語は、単に異界での出来事を記すものは基本的になく、ほとんどは現実世界の人が異界に行き、そして最後には異界から帰るストーリーである。現実と非現実との交錯は唐代小説をはじめ中国古典小説の特徴だと言える。

しかし、中国古典小説中の異界を対象とする先行研究では、往々にして異界自体に焦点をあて、異界の住人、出来事、環境を中心として研究を展開してきた。現実世界の人と異界との関係に言及した先行研究は、管見の限り、異界に入る方法と通路を論じた何篇かだけである。これらの先行研究の内容は後にまた詳しく述べる。小論では、異界に入る方法と通路だけではなく、異界に入る原因と条件、つまりなぜ異界に行くか、なぜ異界に行けるかも研究する。さらに異界に入るだけではなく、異界から出る原因、条件、方法、通路もまとめる。

魯迅の「造伝奇之文、薈萃為一集者、在唐代多有、而煊赫莫如牛僧孺之『玄怪録』（伝奇の文を造り、薈萃して一集と為すは、唐代に在りて多く有れども、煊赫たること牛僧孺の『玄怪録』に如く莫し）」[1]という評価のように、『玄怪録』はまさに唐代小説の代表的な小説集である。『玄怪録』には異界を含む物語が多く、その中の異界の種類も多くあり、単篇の小説を分析することに比べて大きな利点がある。しかし、ただ一つの小説集を分析すれば作者の好みに影響される可能性がある。そのため小論は『玄怪録』の続書と思われる『続玄怪録』『河東記』『宣室志』も研究の対象として分析する。

中唐晩期に成立した『玄怪録』に対して、李復言の『続玄怪録』[2]は晩唐前期に成立したものであり、書名から『玄怪録』の続書であることがわかる。薛漁思の『河東記』も晩唐前期に成立し、晁公武『郡斎読書志』に「右唐薛漁思撰、亦記譎怪事。序云続牛僧孺之書（右は唐の薛漁思の撰、亦譎怪の事を記す。序に牛僧孺の書を続すと云う）」[3]という記録があり、ここから『河東記』は『玄怪録』の続書であることがわかる。『河東記』は現存三十四篇で、すべて『太平広記』に見える。

晩唐中期に成立した『宣室志』の作者張読は牛僧孺の孫であり、『四庫提要』の「所記、皆鬼神霊異之事、豈以其外祖牛僧孺嘗作『元

怪録』、読少而習見、故沿其流波歟（記す所、皆鬼神霊異の事なり。豈其の外祖の牛僧孺嘗て『元（「玄」の避諱）怪録』を作り、読少くして習見するを以て、故に其の流波に沿うか）[4]という文から見ると、紀昀は『宣室志』が『玄怪録』の「流波」だと考えている。この『提要』に従うと、『宣室志』は『玄怪録』の影響を受けたものだと判断できるので、続書と見なすべきだろう。この三つの続書にも有名な伝奇小説が何篇も含まれており、『玄怪録』と同じく唐代小説集の代表作と言える。そして、『玄怪録』とその続書の中には志怪小説も多く収められている。そのため、この四つの小説集の異界物語を分析することを通して、唐代小説中の異界物語の全貌が見えると考える。小論では、『玄怪録』とその続書の中の異界物語を用いて、現実世界の人の異界往還描写を通して、唐代の人が自身と異界との関係をどのように考えていたかを考察したい。

一、『玄怪録』とその続書の中の異界を含む物語を選び出す

異界往還を研究するため、まずは異界の定義に基づき、異界を含む物語を探し出すことが必要である。しかし、先行研究による異界の定義と説明は曖昧で矛盾する所がある。すなわち現時点では異界に対する統一の認識はまだ成立していない。小論では「異界」が「現実世界と違う」という観念から、異界の要素をまとめ、さらにその中から三つの基準を定めた。これらの基準に基づき、四つの小説集から異界を含む物語を選び出す。

1、異界を含む物語の判別方法と分類方法

異界及び異界と見なしうる仙界（仙境、仙府）などについて論じる先行研究は、主に以下の六つがある。それぞれ主要な論点を以下に挙げる。

①柳瀬喜代志「仙界へのまなざし――男の楽園としての異界」：「神人」は…人間界と遥かに隔たった異界の神仙のこと。[5]

②先坊幸子「六朝の異界説話」：人間が日常と違う世界に入り込み、また元の世界に戻ってくる。[6]

③原田二郎「異界への道――中国小説の場合」：仙界は冥界以外の神仙、妖怪、狐狸の類が住む所とする。その特徴は人間世界と地続きであり、空間的に遠くてたどり着き難いが、異次元にあるものではない。[7]

④張玉蓮「古代小説的異境構建」：異境は人が想像する異類の世界。人間世界と明らかな境界がなく、時に交じりあっている。[8]

⑤岳之淵「重復書写与唐代凡人遊歴仙境故事類型的形成」：仙境は人境に対する人間世界以外の神聖な世界である。[9]

⑥李佩玉「裴鉶『伝奇』空間叙事研究」仙府は大部分深い水の下や山と洞窟の中にある。凡人は入ることが少なく、仙人からの誘いや仙女と結婚する前提があれば入れる。[10]

これらの定義或いは説明には、相反するところが見える。例えば異界は⑤の人間世界以外の世界であるとするのに対し、③では人間界は別次元にあるものではないと見なすこと、また①の異界が人間界と遥かに隔たった場所であるとするのに対し、④では異界が人間世界と交じり合っていると見なすことなどの矛盾点がある。これらの矛盾点は今のところ統一された異界の定義がないことを証明する。これから

『玄怪録』とその続書における異界の定義を明確にし、異界を含む物語を抽出することを試みる。

「異」という字の最も多く使われる意味は「ことなる」である。そのため、「異界」は「ことなる世界」という意味である。何と異なるかというと、現実世界である。作者が人である以上、比較の基準はやはり人が生活している現実世界である。小論でひとまず「異界」を現実世界と違う世界と定義する。四つの小説集のうち次の二つの物語には主人公の入った空間が現実世界と違うと明確に書かれている。

「竇玉妻」：此非人間、乃神道也。所言汾州、陰道汾州、非人間也。（此れ人間（じんかん）に非ず、乃ち神道なり。言う所の汾州は、陰道の汾州、人間に非ざるなり。）[11]

「石室銘文」：前対霞翠、固非人境。（前に霞翠に対し、固より人境に非ず）[12]

「竇玉妻」の記述において、陰道（冥界）は現実世界と違う異界だと、作者は見なす。また、「竇玉妻」では神道にと記したが、この神道は冥界を指している。しかし「石室銘文」の記述からみると、一般的な意味上の神道である仙界も異界と見なされている。実は、別の唐代小説集である『逸史』の「崔生」では、「此非人世、乃仙府也（此こは人世に非ず、乃ち仙府なり）」[13]と書いており、はっきりと仙府（仙界）が異界であることを記している。つまり、唐代の人は仙界と冥界を異界と認識したことが推測できる。これに従い、四つの小説集の物語の中の主人公が「仙界」や「冥界」或いは同じ意味の名称を持つ空間に入ると明記してあれば、主人公が異界に行ったと判断できる。このような物語は以下である。

仙界：「張老」、「麒麟客」、「遊仙都稚川」、「玉清三宝」

冥界：「董慎」、「南纘」、「蘇履霜」、「景生」、「盧頊表姨」、「張質」、「韋氏子」、「崔紹」、「盧従事」、「婁師徳」、「竹季貞借屍還魂」、「開尹真人石函得罪」、「幽顕之恨」、「鋳佛像得復生」、「地府巡査使」

他に直接に仙界や冥界と書いてないが、その空間の名を記し、名を通してその空間が仙界や冥界の一部分だと判断できる例がある。冥界の場合は判断しやすい。例えば「王国良」の太山府君院、「董観死而復生」の奈河。仙界の場合は山や洞窟など現実世界と境を接する所もあるので、今はただ仙島と竜宮を仙界の一部と見なす。例えば「楊敬真」の蓬莱、「李衛公靖」「消麺虫」の竜宮。

以上の物語から、以下の五つの異界の要素をまとめ、さらにこれらの要素をもつその他の小説を抽出しておく。

❶その空間を再び訪ねることができない。

この要素は「李衛公靖」、「玉清三宝」、「石室銘文」に現れている。この要素には二つの状況がある。一つ目は、元の所に行くと、かつて建物などがあった空間が消えたという状況であり、二つ目は、元の所に戻る通路が消えたという状況である。両方とも主人公が行った空間は現実世界と違うことが証明できるので、異界の判別の基準となりうる。この要素によって、「柳帰舜」、「崔書生」、「来君綽」、「滕庭俊」、「袁洪児誇郎」、「劉法師」、「鄭望」、「杜子春」、「張寵奴」、「唐俠」、「呂群」「鄭徳楙鬼婚」、「王先生道術」、「許貞狐婚」の十四篇が異界を含む物語として抽出できる。なお、「李汭」の話は状況が少し異なっている。主人公が異界の所在地を知り、その範囲で隅々まで探したが見つからず、その後、使者の導きで入ることができた。使者が導くという条件を満たさないと入れないことになるので、これは入る通路が消えた状況の変形と見なせる。

❷その空間に長く滞在することできない。

この要素は「董慎」、「王国良」、「蘇履霜」、「景生」、「盧頊表姨」、

「張質」、「竇玉妻」、「遊仙都稚川」、「婁師徳」、「鋳佛像得復生」に現れている。主人公がその空間にいる素質を持っていないので長く滞在することができない。現実世界の人としての主人公が長く滞在できないことは、その空間が現実世界ではないことを表すので、この要素も異界を判断する基準になりうる。この要素に基づくと、「張左」、「裴諶」、「斉饒州」、「呉全素」、「馬僕射総」、「李紳」、「李敏求」、「韓氏前生冤讐」、「張汶死而復生」の九篇は異界を含む物語である。

❸その空間の時間の流れは現実世界とずれる。

この要素は「柳帰舜」、「董慎」、「張左」、「景生」、「麒麟客」、「張質」、「崔紹」、「開尹真人石函得罪」、「幽顕之恨」、「張汶死而復生」、「鋳佛像得復生」に現れている。時間は空間の重要な要素の一つなので、時間の流れのスピードが違う空間は別の空間と判断できる。この特徴について多くの先行研究[14]はすでに論じた。四つの小説集で「古元之」、「崔環」の二篇の物語は文章の最後で主人公が異界にいる間に現実世界でどのぐらいの時間が経つかを記録しており、すなわち異界を含む物語である。主人公は異界で大体一日未満の時間を過したが、現実世界では基本的に数日の時間が経っていた。（具体的に附表九を参照せよ。）

❹その空間に入る条件はその空間の人からの誘いや導きである。

この要素は大部分の物語に現れているが、一部の物語、例えば「柳帰舜」、「来君綽」、「蘇履霜」ではこの条件を満たさなくても主人公は異界に入ることができた。そのため、この要素は単独では判断の基準になることができない。ただし、判断の補助となりうる。

❺その空間の情景は不思議である。

この要素も大部分の物語に現れている。この要素は程度の問題があるので、単独で判断の基準になることができないが、判断の補助となりうる。もし作者が直接に「奇」「異」などの字を使って主人公が情景の奇異を感じることを明らかにしてあれば、その空間は異界と判断できると思う。例えば「駱玄素符術」は、情景について「珍木奇花」[15]と述べ、さらに「東真君」という異人が主人公を導いてその空間に入り、そこで異能力を教えるという内容を加えて考えると、その空間は異界と見なすべきである。

また、はっきり異界だと書いていないが、設定や描写から作者は物語中の空間が異界であることを暗示している場合がある。一つ目は、空間の名或いは仙界や冥界に属することは明記されていないが、ロジックから推測できる例。例えば「蕭洞玄」、「許琛」、「冊立閻波羅王使」の中の官府である。この官府で扱う裁判の案件は、全て人の寿命や蘇生と関係があるため、その官府は冥府だと推測できる。また「蘇州客」の中の空間は水中にあり、建物の持ち主は竜で、すなわちその空間は竜宮である。

二つ目は現実世界に本来存在しない空間が現れれば、それも異界と推測できる。例えば、「金天王」には本来華山の神金天王を祭る西岳廟は、物語では金天王が命に関する案件を裁判する場所になる。つまり建物の内部の様子が全く変わる。さらに、主人公が金天王からもらったお金は華岳廟から出ると冥界のお金になるという描写があるので、主人公が入った華岳廟は冥界だと推測できる。

以上の分析を通し、異界の定義は「仙界や冥界など現実世界と違う空間で、人は人間という身分をもってその空間に長く滞在することができない、或いは再び訪ねることができない場所」とすることができよう。つまり、要素❶、❷、❸は、異界の判断基準になり、要素❹、❺は判断の補助になる。

2、異界物語の分類整理

異界物語なので、やはり異界の種類によって分類する。「唐人異境故事中的時間与空間書写」中に「現在の研究では、多くの学者がテーマから切り込み、物語のタイプを仙界と冥界の二つに分類して」[16]いると述べたように、異界を仙界・冥界と分類するのは一般的である。その理由は、仙界と冥界の性質は違うからである。例えば、現実世界の人が冥界に行く時は基本的に魂だけが入るが、仙界に行く時は体も入る。（もちろん例外はあるが、極めて少ない。）小論でも、仙界・冥界の類を設ける。

実は、仙界・冥界以外に、もう一種類特殊な異界が存在する。それは「幻化空間」である。管見の限り、幻化空間を指摘した先行研究は、「唐人小説遊歴異境故事研究」[17]だけである。他の先行研究では「幻化空間」に属すべき異界を仙界や冥界に分類している。しかし、幻化空間は仙界、冥界と性質が異なる。仙界や冥界は、神仙や亡霊の生活するところとして常に存在しなければならない。それに対して、幻化空間は基本的に現実世界に対応する空間がないと存在できない。例えば墓から変化してきた幻化空間は、主人公には家などに見えるが、現実世界では墓という対応した原型空間がある。幻化空間の中の異人も常に現実世界で対応するものがある。他にも、異能力を持つ人が術によって作った特殊な幻化空間もある。小論では仙界と冥界以外に、「幻化空間」という類を設ける。

前節の分析によって、四つの小説集より五十八篇の異界を含む物語を抽出した。これらの物語を異界の種類によって整理して分類すれば、以下の表が示すようになる。

	玄怪録	続玄怪録	河東記	宣室志
仙界	崔書生 李汭 劉法師 張左 柳帰舜 古元之	蘇州客 杜子春 張老 麒麟客 李衛公靖 李紳 裴諶 楊敬真	呂群	玉清三宝 消麺虫 石室銘文 駱玄素符術 許貞狐婚 遊仙都稚川
冥界	袁洪児誇郎 董慎 南纘	竇玉妻 崔環 斉饒州 呉全素 王国良 馬僕射総 盧頊表姨 張質 韋氏子 蘇履霜 景生	蕭洞玄 李敏求 許琛 崔紹 盧従事	金天王 婁師徳 竹季貞借屍還魂 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 地府巡査使 張汶死而復生 董観死而復生 幽顕之恨 鋳佛像得復生 鄭徳楙鬼婚 王先生道術
幻化空間	来君綽 滕庭俊 鄭望	張龍奴 唐俔		

3、物語中の異界について

五十八の異界の中で最も多いのは冥界であり、半分以上の量を占める。この数から見ると、唐代の人は仙人になることより、死後の生活に大きな興味を持っていると言える。誰でも仙人になる素質を備えているわけではなく、仙人になる条件も多く存在する。しかし、人であれば必ず死を迎える。そのため、唐代の人の異界に対する関心の大部分は冥界が占めている。冥界の物語の三分の二以上には冥府が現れる。つまり、冥府で行われる命に関する裁判は唐代の人が最も関心を払うことである。

冥界に対する関心が高いため、冥界、特に冥府に対する設定が詳し

い。大部分の冥府には名前がある。例えば「王国良」の太山府君院、「崔環」の判官院、「張質」「韋氏子」「婁師徳」などの地府などがある。名前がなくても、判官の官職名を記されることが多い。例えば「董慎」「李敏求」の太山府君、「蕭洞玄」「盧従事」の平等王などがある。

それだけではなく、唐代の人は冥界の住人（亡霊）の死にまで関心を払った。「許琛」では主人公が異人に鴉鳴国はどのような国であるかと聞くと、異人は「人死則有鬼、鬼復有死、若無此地、何以処之（人死せば則ち鬼有り、鬼復た死有り、若し此の地無ければ、何を以て之に処らん）」[18]と答えた。つまり鴉鳴国は鬼（亡霊）が死んだ後の生活場所である。他にも、冥府以外の冥界の場所を記す場合がある。例えば奈河などである。

冥界の物語の発生地は冥界の官員の家の場合がある。この種の物語は他の冥界の物語と違い、すべての主人公は体も冥界に入る。異人の家の景色も、仙界の中の異人の家と似ている。その理由は、冥界の官員が神仙に属するためである。文中で異人が明確に主人公のいる所は冥界だと言ったため、物語の発生地は冥界にあると判断できる。

一方、仙界の物語の発生場所は、官府のような公共の場所より、異人の家のような私有の場所のほうが多い。その理由は、仙界の物語は大体現実世界の人と異人個人との付き合いからである。もちろん、物語の発生地は仙界の官府である場合もある。これらの物語は主人公が往往にして官府の他に異界中の別の所にも行ったという特徴がある。

幻化空間の物語の数は少ないが、仙界と冥界より宗教色が薄いので、作者の娯楽的趣向を最も反映する異界の種類と言える。

4、唐代の人の異界に対する観念

「唐代都市小説叙事的時間与空間――以街鼓制度為中心」では「唐人小説中、また現実世界といつもつながる超現実世界があり、この経験と想像によって創造された世界は現実世界と並行的に存在しているだけではなく、両者の間には絶えず交流と転換が行っており、これによってともに一つ完全な唐代世俗世界を構成する」[19]と指摘するように、異界はすなわち現実世界の並行世界である。ただしこの論文ではこの点について詳しく論じていない。「唐代伝奇「枕中記」の〝夢〟と〝異界〟を巡る物語認識の変容」[20]では、枕中の世界は現実世界の並行世界であることを指摘した。

枕中の世界だけではなく、例えば「南纘」には「雖陰陽有殊、然俱是同州也（陰陽殊なる有りと雖も、然れども俱に是れ同州なり）」[21]という文があり、この文から見れば、作者は冥界に現実世界と同じ所があると考えていることがわかる。この観念は他の物語にも現れる。すなわち、冥界に現実世界と同じ空間があるということは、唐代の人にとって普遍的な観念である。そのため、冥界は現実世界の並行世界と言えるだろう。ただし、冥界は完全に現実世界と同じであるわけではない。「董観死而復生」が述べたように、現実世界の人は冥界の町で生活する前には、まず奈河という冥界特有な場所を渡らなければならない。ただし、冥界全体について、「一似人間模様（一に人間の模様に似る）」[22]、「冥途与世人無異（冥途と世人と異なる無し）」[23]などのように、死後の生活は現実世界の生活と大きな区別がないと書かれている。それは唐代の人が異界に対して具体的な異を表すのに熟練していない一方、死後の世界と現実世界にあまり違いがないように望んでいたのかもしれない。

幻化空間は現実世界で対応の空間があるため、並行世界とも解釈で

きる。仙界の状況は複雑で、一部の仙界は現実世界と一致する空間がある。例えば「杜子春」の主人公が再び華山雲台峰を訪ね、山頂では人の痕跡がなくなり、前に行った時そこにある老人の家や煉丹炉はすべて消えてしまっていた。すなわち主人公が前回に行ったところは現実世界の華山雲台峰ではなく、並行世界の華山雲台峰であり、そこには老人の家や煉丹炉がある。しかし老人の導きがなくなり、そこに入ることができず、山を登っても現実世界の山頂に着き、現実世界の山頂の風景しか見えない。現実世界の山頂はただの自然風景であり、老人の家の跡は見つからない。もちろん、現実世界と一致する空間がない仙界もある。例えば「玉清三宝」の仙界玉清宮[24]である。しかし、「再び入れない」「長く滞在することができない」などの要素から見ると、これらの仙界も間違いなく現実世界とは別の世界である。並行世界と理解しても良いだろう。

では、並行世界へどのように入るのかというと、まず冥界は人が亡くなったら原則行かなければならない場所のため、「婁師徳」には「冥道固与人接迹（冥道固より人と迹を接す）」[25]の文がある。すなわち冥界の入り口は常に開いているのである。さらに「定婚店」の中で、「今道途之行、人鬼各半（今道途の行くは、人鬼各々半なり）」[26]というように、現実世界と冥界は時には交わっている。これは冥界に現実世界と同じ空間があるからこそ出現できるのである。

幻化空間も現実世界で対応の空間があるため、わりと入りやすい。主人公は往々にして偶然に入ってしまう。主人公が幻化空間へ入る時には、ちょうど異界が現実世界の空間を覆っている。そして特殊な幻化空間である「王先生道術」での異界は、異能力者の術によって作り、現実世界の空間を覆った。

仙界の場合は例えば、「玉清三宝」には「此乃玉清宮也。…是以仮鄭氏之亭以命君（此れ乃ち玉清宮なり。…是を以て鄭氏の亭を仮りて以て君を命ず）」[27]とある。この文から見ると、異人は現実世界にある鄭氏亭の空間を使い、辿り着きにくい玉清宮への入り口を開き、登るという動作だけで現実世界の人を簡単に入らせることがわかる。この解釈は他の仙界、さらに冥界・幻化空間に対しても通用する。

二、異界往還の内容

この章では現実世界の人の異界往還の原因、条件、方法、通路を分析することを通して、現実世界の人がなぜ異界に行くのか、どのように行くか、そしてなぜ帰ることができるのか、どのように帰るかについて唐代小説の作者の考えを明らかにする。具体的な統計結果は附表を参照せよ。

1、異界へ行く

(1)原因

一つの物語に現実世界の人が異界に行く原因はいくつかあるが、ここでは根本的な原因だけを取り上げる。例えば、「遊仙都稚川」の主人公はある日、訪ねて来た道士に将来仙都を訪ねることができると言われ、導く人と出会う方法を教えてもらった。主人公は言われた方法で導く人と出会い、その人に仙都稚川を訪ねることを頼んだ。最後に導く人は主人公を連れて稚川に行った。「遊仙都稚川」の主人公が仙界へ行く直接的な原因は、導く人に願ったためであるが、道士の言葉によって仙都を訪ねる意欲が生じないと、主人公が導く人に頼むことは発生しないであろう。つまり「遊仙都稚川」の主人公が異界へ行く根本的な原因は異人に誘われることである。また「張老」において異

界を訪ねる現実世界の人である張老の妻の兄の異界を訪ねる原因は、張老の妻が張老とともに家に戻った後、妻の家族は彼女を心配し、兄が代表として、張老の家を訪ねることになったためである。もちろん、張老の妻が張老と結婚しないと、妻の兄は彼女に訪ねることは発生しない。しかし、張老と妻の結婚は必ずしも兄が訪ねる原因になるわけではない。そのため、「張老」の現実世界の人が異界へ行く原因は現実世界の人と異人が結婚することではなく、現実世界の人が異人を訪ねようとすることである。以上の二例により、根本的な原因は、文脈のロジックによって判断することが必要だとわかる。なお、原因に言及しない物語もある。

また、現実世界の人が異界に行く原因は、異人と関わる外部原因と主人公と関わる内部原因の二つに分けられる。外部原因は異人に誘われる、異人を手伝わせられる、異人に説教される、裁判を受ける、任命される、異人に遊ばれることの六つがある。内部原因も異人を見送る、異人や異人の家を訪ねようとする、異人にお願いする、泊まる所を探す、乗る馬を探す、死亡の六つがある。しかし、外部原因の物語の数は、明らかに内部原因の物語より多い。特に異人に誘われるという原因は十七篇あり、すべての異界の種類を含む。ここから見ると、現実世界の人が異界に行くのは、自分の意志ではなく、異人の現実世界の人への招請と需要が主な原因である。内部原因の中でも、死亡は自然と起こることであり、泊まる所を探すことと乗る馬を探すことは主人公が偶然異界に入る原因で、主人公が意識して異界に入るわけではない。異人を見送る、異人や異人の家を訪ねようとする、異人にお願いするという原因は主人公の意志で行う動作であるが、ほとんどの物語の主人公は異界に入る前に目的地が異界であることを意識しなかった。実は、「劉法師」だけ、主人公は異界に入る前にこれから入るのは異界だという予想がついた。しかし、この物語の主人公は異人の誘いがないと異界に行くことができない。そのため、作者達の考えは、現実世界の人が異界に行こうと努力しても、行く前に異人とかかわりがないと基本的に行けないことがわかった。つまり、現実世界の人自身の意志だけでは異界に入ることができない。

また、異人に誘われる原因のように二つ以上の異界の種類を含む場合があるが、一つだけの場合もある。例えば、異人を見送る、異人や異人の家に訪ねようとするという二つの内部原因は仙界だけの原因である。なぜなら、冥界は現実世界の人が普通行きたくない所であり、幻化空間は通常無意識に入った所である。乗る馬を探すことも仙界だけの原因である。対応する物語「許貞狐婚」は、主人公が夜に酔っぱらって馬を失い、馬を探す時に道に迷って異人の家を見つけた。これは泊まる所を探すという原因の変形と見なすべきである。冥界だけの原因は裁判を受ける、任命される、死亡の三つがある。ここの裁判を受けることは命に関わる裁判を受けることであり、誤って冥界に連れて行かれる場合も含む。任命されることは冥界の官員に任命されることを指す。仙界にも官職があるが、仙人になりたい人が多いため、普通は空きがない。それに対して、冥界の官職は時には空きがあるため、現実世界の人を招いて冥界の官職を任せる。この二つの原因は「冥界与唐代叙事文学研究」でまとめた罪で捕らえられる、任命させる、誤って捕らえられるという三つの主な冥界へ行く原因[28]と基本的に一致する。また、死亡という原因について説明する必要がある。もし作者が主人公の死亡の原因を明らかに書いていなければ、自然の死亡と見なし、主人公が異界に行く原因とする。もし異人に誘われる、任命される、裁判を受けるなどによって主人公が死んで異界に行く場合は、死亡は異界に行く方法として見なす。

(2)条件

条件は原因と違い、現実世界の人がなぜ異界に行くかを解明することではなく、なぜ異界に行けるかを解明することである。そのため原因と比べると、比較的に客観性がある。異界に行く条件も現実世界の人自身に関わる内部条件と、主人公が異界に入るために異人が手助けすることのような外部条件に分けられる。そして原因と異なり、一つの物語にいくつかの条件がある場合、すべて取り上げる。外部条件は異人に呼ばれる、異人や使者に導かれる、所在地や行く方法を教えてもらう、入る許可をもらう、儀式をする、夜や夕暮れの六つがある。内部条件は異人と知り合う、試練を完成する、才能や素質を備える、寝る、病の五つがある。

異人や使者に導かれる、入る許可をもらう、異人と知り合う、才能や素質を備える、夜や夕暮れという五つの条件は三種類の異界の物語に現れ、原因と比べると、条件の共通性が高い。それに対し、所在地や行く方法を教えてもらうという仙界だけの条件と、異人に呼ばれる、儀式をする、寝る、病という冥界だけの条件がある。所在地や行く方法を教えてもらう場合は、主人公がすべて自分で行くため、冥界や幻化空間には通用できない。それに対し、現実世界の人は冥界に行きたくないものの、異人に呼ばれることにより、行かなければならなくなる。また、寝ることと病も冥界に行く時の条件であるが、他の内部条件と比べると少し違いがある。他の内部条件は積極的であり、仙界の物語も多いが、この二つは主観性が低い。この二つと夢・死との区別は、この二つは異人が主人公を異界へ連れて行くため現実世界に来る前に主人公がすでになった状態であり、つまり主人公が寝る・病の状態になってこそ、異人が現れる。それに対して異人は主人公の夢で主人公の魂を異界へ連れて行き、その時主人公の体は仮死状態になるため、夢や死は主人公が異界に入る時に発生することである。ゆえに夢と死は異界に入る方法とする。

これらの条件から見ると、作者達の観念では、現実世界の人が異界に行くには、異人の誘いが重要である。そのため、異人に呼ばれる、異人や使者に導かれる、入る許可をもらう、所在地や行く方法を教えてもらうなどの条件を備える物語の数が多い。さらに、誰でも異界に行けるわけではなく、現実世界の人自身が特定の条件を備えたら異界に行けることになる。また、作者の観念では夕暮れから夜は異人や異物が活動する時なので、その時間帯に異界に行くのは簡単になる。

(3)方法

異界に入る方法は、基本的に歩いていくので、ここでは統計しない。徒歩以外、馬や車に乗ることもある。更に、異界の雰囲気を作るため、仙界の物語は馬の代わりに、虎・鶴などの普段乗れない動物、また木簡・竹杖などの物に変える。特に虎以外は、地面で移動せず、空を移動する。現実世界の人は飛ぶことができないので、作者達の考えでは、空を移動することは異人の異の表現の一つである。更に、飛ぶことを物に頼らず、異人自身が飛べる場合もある。

また、袋に入れられる、袋を頭に被られる[29]、目を覆われるや閉じられるなどの行為は異界に行く通路を見せないためである。これも異界の神秘性を表すための設定の一つである。

そして、魂だけ異界に入る場合、よく夢や死が伴う。これについて先行研究[30]はすでに指摘した。魂だけ異界に入ることは基本的に冥界巡遊譚の設定であるが、「古元之」だけは仙界の物語である。

他に、橋を叩く、杖で地面に描くという方法がある。これらの動作は異界に行くために要求される動作や異人が異界を作る動作である。

ただし、やはり大部分の物語の異界に入る方法は普通の移動手段である。これは現実世界の人の能力とも関係があるが、作者達の考えでは、異界に行く方法には原因や条件ほど制限が多くない。大部分の物語の異界へ行く方法に対する描写は簡単であるが、乗り物の選択は逆に作者の想像力が表現できるところである。

(4)通路

「玉清三宝」、「遊仙都稚川」などの物語で異界へ行く途中に上に登ることがあるが、目的地の所在地は地面にある山や建物なので、垂直方向の移動と見なすべきではないと考える。異界に行く時の移動方向はすべて水平方向である。注意すべきなのは、現在の考えでは冥界は地下にあるが[31]、唐代小説の中では、冥界に行くことは、一般的に水平移動である。冥界の物語の大部分の行く方向は北であることに対して、仙界に行く方向は多くある。そのうち「古元之」は主人公が異人とともに南西の方向へ飛んで理想郷のような異国に行く。当時中国南西地方がまだ未開化で、行くことが困難なため、唐代の人にとって神秘的な空間である。そのため、作者は異界をその方向に置いたであろう。陶淵明の『桃花源記』の中の理想郷も、中国南西地方にある。

異界までの距離は百余歩から数百里まで範囲が広い。仙界の物語は三、五里から四十余里の区間に集中する。これは一般人が一日歩ける距離である。それに対して、冥界の物語は大部分が歩という単位を使うほど短い距離と五十里以上の長い距離に分かれている[32]。このように極端に分かれることは、現実世界の人が冥界に長く滞在すると体が腐るという設定と冥界の神秘性を保つため現実世界と距離を置くべきであるという思想との矛盾の体現である。他にも距離の代わりに異界に行く時間を記し、それを短いと記す物語の数が多い。

異界までの途中の風景については、移動の時に目を閉じさせられた主人公の感覚は、実際に見たものではないため、統計に入れない。先行研究[33]では異界へ行く途中で洞窟を経ることに注目し、洞窟の出口を現実世界と異界との境界線と見なす。陳嘉玥は「中国仙境淹留型伝説的空間構建研究」で現実世界の人はよく山林で仙界へ行くことを指摘したが、さらに「山林は主人公が仙界へ入る前に経た一部だけであり、山林の中の洞穴はより具体的な仙界へ行く通路である」[34]と述べた。しかし、洞窟を経て異界に入る物語は、よく六朝志怪小説に現れ、唐代になると洞窟の要素は往々にして失われた。『玄怪録』とその続書の中で洞窟要素と最も近いのは「張左」の耳に入ることである。「遊仙都稚川」中の洞窟はただ異界への道の一部であり、洞窟の出口の先は異界ではない。多くの唐代小説では異界への入口は山中にあり、はっきりとした境界線はない。「唐人異境故事中的空間与時間」では現実世界と異界との境界線を目的地の建物の門に置いている[35]。しかし、目的地の建物を見た時、すでに異界に入ったとするのが一般的な考えであろう。つまり、目的地に辿り着く前の段階ですでに異界に入っている。実際、物語では異界へ行く途中で景色が変わるという記述がある。それは異界に入るシンボルだと見なすべきである。ただし、このような記述がない場合、目的地の建物の門を境界線と見なすしかない。

境界線がはっきりではないため、異界までの道は異界の風景と強く関連する。当時の観念では仙人は多く美しい大自然に住むというイメージがあるため、仙界への道に対する描写も自然風景が多い。冥界は人が死後生活する空間であるため現実世界と似ており、特に冥府は冥界の町の中にあるため、冥界の物語は多く主人公が住む町から出ることから書き、町の風景はよく現れる。また、冥界への途中の自然風

景は原野、荊棘など凄まじく、冥界の雰囲気に合う景色である。そして、異界への入口の所在地については、冥界の物語では一つしか記されないことに対し、仙界の物語には多く現れる。その中では、山が多い。その理由は山は人の住む所と一定の距離があり、町の郊外や小道の果てなどの所と比べると行くのが難しいが、行けないわけではない。そのため、山中の異界の景色を描写する時、天界、水界などの異界より参照できる景色が多く、想像しやすい。さらに、一般的に竜宮は水の中にあるが、「李衛公靖」中の竜宮は山の中にある。空中や水中と違い、山中と野外での仙界の入口は現実世界の人が比較的簡単に到達できるので、作者はこれらの仙人の家が仙界だと強調したい時、常に「再び入れない」という描写を物語の最後に附ける。幻化空間の入口の所在地は仙界より人が生活する所に近い。それは幻化空間は仙界と違い、現実世界の人が行きたいところではなく、異人に導かれることもないので、人の活動場所と離れた幻化空間に現実世界の人が入る機会はほとんどないからだろう。冥界への入口の所在地を記す唯一の物語「金天王」では、冥界の空間は華岳廟に置かれている。すなわち泰山府の他に、華山廟も冥府の一つである。さらに、「冊立閻波羅王使」に「閻波羅王」の地位と職務を「地府之尊者也、標冠岳涜、総幽冥之務（地府の尊者なり、岳涜を標冠し、幽冥の務を総ぶ）」[36]ように述べているので、すなわち「閻波羅王」は冥府の官職で、岳涜（四涜五岳）の上司となる。また「地府巡査使」にも「地府有巡察使、以巡省岳涜道路、有不如法者、得以察之。（地府に巡査使有り、以て岳涜道路を巡省し、法の如くせざる者有れば、得て以て之を察す）」[37]という描写がある。ここで「岳涜」を強調するのは、おそらく唐代の人の観念で、泰山だけではなく、四涜五岳はすべて冥府の所在地だと考えていたからだろう。

2、異界から帰る

(1)原因

異界から帰る原因も行く原因と同じく、根本的な原因だけ採用する。異界から帰る原因は行く原因より数が多いが、また内部原因と外部原因に分けられる。内部原因は帰りたがる、現実世界の人と用事がある、用事が失敗する、異人になれない、命がある、来るや長くいることができない、異人と一緒に別の所に行くことができない（来るや長くいることができないことの変形）、異人と別れることの八つがある。外部原因は用事が終わる、帰ることを要求される、朝になる、誤って呼ばれた、異人に救われる、人に捜されることの六つがある。内部原因の中では来るや長くいることができない、異人と一緒に別の所に行くことができない、命があるという原因は主人公が持つ素質と関係があり、主人公自身がコントロールできないことである。異人になれないことも一見コントロールできないことであるが、この原因を持つ二つの物語は主人公が質問に答えられないことや正しく答えられないことによって異人になれないため、実際は主人公の悟りと関係があり、用事が失敗することと似ている。また、異人と別れることは主人公が異界にいる間、そこが異界であることを全く意識しなかったため自然に発生したことである。

外部原因はまた異人に関する原因、主人公以外の現実世界の人に関する原因、自然の原因の三つに分けられる。異人に関する原因は帰ることを要求される、誤って呼ばれた、（異界でのと現実世界からの）異人に救われることの三つがある。主人公以外の現実世界の人に関する原因は人に捜されることであり、他の二つは自然の原因である。ここで注目したいのは事情が終わるという原因である。この用事は裁判や招待などがあるが、最も多いのは手伝うことである。すなわち異人を

手伝っても異界に残れるわけではない。手伝うことが失敗したらなおさらである。

帰る原因は行く原因と一定の対応関係を持つ。また、冥界の物語では来るべきではないことや長くいるべきではないことを強調するのに対し、仙界の物語では直接帰ることを要求する。幻化空間の場合は主人公が出るまで異界にいたことを意識しないので、自ら異人と別れて離れる場合が多い。

異界に行く原因と比べると、内部原因の項目が増え、物語の数も増えた。特に行く場合は異人の意志は絶対的であることに対して、帰る場合は帰りたがるという現実世界の人が主動的に異界から帰ろうとすることが原因である物語の数が多くなる。（現実世界の人と用事があるため主動的に異界から帰ろうとする物語も一篇ある。）つまり、異界から帰る時、主人公の意志は比較的有効になる。

(2)条件

原因と違い、異界から帰る条件は行く条件より少ない。これらの条件のうち、異人や使者に導かれる、道を教えてもらう、帰る許可をもらう、異人を手伝わせるという外部条件が主な条件となる。すなわち作者達の観念では、主人公が帰りたがっても、異人の手伝いがなければ帰ることはできない。

残りの異人に賄賂することは内部条件である。「呉全素」の作者はこれを通して現実世界を風刺している。

行く条件と帰る条件には共通の項目が三つある。行く時も帰る時も道を教えてもらうという条件を備える物語が一つもない。その理由は物語の主人公はほとんど元の所へ帰るので、再び道を教える必要がないためである。同じ理由で以下の状況も説明できる。使者や異人に導かれる条件を行く時と帰る時の両方とも備える物語は十九篇あるが、片道だけある物語もある。そのうち、行く時のみ書いた物語は二十篇で、帰る時のみ書いた物語はたった三篇である。

(3)方法

異界から帰る方法は行く方法と似ていることもあり、行く方法にないこともある。似ている部分は、袋に入れられること、目を覆われることや目を閉じられることである。行く時も帰る時も主人公が同じことをされる物語は二篇あるのに対し、片道だけの物語もある。また、馬などの動物や物に乗る方法は帰る時も使う。帰る時も馬の使用が最も多いが、行く時と帰る時は必ずしも同じ動物や方法を用いるわけではない。そのため、帰る時使う動物の種類が少なくなり、動物に乗る方法を書く物語の数も少なくなった。「李紳」は主人公が帰る時に目を閉じた後に駅のようなものに乗っていると感じた。ただこれは感覚なので本当かどうかは不明である。

さらに、物に乗って飛ぶ方法は帰る時には見られない。主人公が異人とともに飛ぶことが帰る時にもあるが、この方法を書く物語の数は少ない。注目すべきなのは落ちるという動作である。これを含む物語は「馬僕射総」と「楊敬真」以外すべて「如」「若」を使い、主人公が落ちるような感覚である。しかし、仙界の物語なら落ちる前に飛ぶ、或いはそれに似た動作があるが、冥界の物語は主人公が行く時はすべて水平移動であり、帰る時は突然下への垂直移動が見られる。この点について劉成竜[38]はすでに指摘している。下への移動は冥界が現実世界の地下にあるという一般認識とも矛盾している。おそらく主人公を目覚めさせるための設定である。

「馬僕射総」は主人公が使者の突然の大声で驚き、馬から落ちて目

を覚ました。このような使者に大声で、或いは名前を呼ばれることによって現実世界に戻った物語は五つある。そのうち「袁洪児誇郎」と「滕庭俊」では、主人公は現実世界から名前が呼ばれる。それは主人公を異界から呼び戻すためである。「滕庭俊」はさらに主人公がそれに答えることを強調する。残りの三篇の物語では、主人公を大声で（場合によって名前を）呼ぶことで驚かせて目覚めさせる。さらに、「崔環」のように主人公が驚いてドアにぶつかって目を覚ましたこともある。主人公を驚かす方法は大声で呼ぶ以外に、主人公を推すことや主人公に水を浴びせることもある。つまり、特に冥界の場合、現実世界の人を異界から呼び戻す重要な方法は、現実世界の人を驚かすことである。

目覚めることや蘇生することは主人公が驚かされて異界から帰るための最後の一歩である。帰る時の事情を詳しく書く物語は通常目覚めるという動作を書き、省略されている場合はただ蘇生することを記す。「盧従事」と「蕭洞玄」は特殊で、生まれ変わることである。冥界巡遊譚は多く、目覚める、蘇生する、生まれ変わることが結末になり、特に行く時に寝る、病気になる、死ぬことがあれば、最後に必ず目覚めることがある。

行く時に全くない方法は眠ることと這うことである。眠ることによって主人公が意識を失い、目覚めたら現実世界に戻る。さらに「古元之」の主人公は酔っぱらって眠ることになる。主人公が這う方法を使う理由は異界からこっそり出る場合もあり、異界で刑罰を受けたので歩けなくなった場合もある。

(4) 通路

帰る通路に対する描写は行く時より簡単である。それは行く時すでに描写したことと関係があり、また主人公が早く出たいという気持ちと主人公が異界に長く滞在することができないことと関係がある。

帰る方向を記す物語は行く時と比べると数が少ないが、行く場合とほぼ対応関係がある。距離の方面では、数歩から百余里まで幅が広いが、行く時の距離と比べると、相対的に短い。特に仙界の物語では、帰る場合に数歩の距離がある。主人公が異界から出るとすぐ現実世界に戻り、後ろの風景は異界の景色から現実世界の景色に変わる。つまり、仙界へ行くのは長いが、仙界から現実世界へ戻るのは短い。往還の距離の違いをもって仙人になることが難しいことを暗示する。冥界の物語での帰る距離は数里から百余里まであり、行く時と大きな違いはない。行く時も帰る時も距離を記す物語では、帰る距離は行く距離よりやや短い。時間は同じく行く時より短いほうが多い。

途中の風景については、冥界の物語「崔環」と「呉全素」の二篇のみが町の景色を描写している。この二篇は主人公の魂が冥界から出て体と合わせる前に、使者に現実世界で手伝わせられたので、手伝うことに伴い作者は現実世界の町の風景を描写した。多くの物語では、帰る目的地を記している。これらの目的地では家や臨時住所は最も多い。寺や道観などの宗教場所も、実際には主人公が住んだり泊まったりする所である。住む所ではなくても、出発の所に戻る場合は多くある。例えば異能力者の家で儀式をして異界に行く場合は帰る時その家に戻る。戻る場所は出発地ではない物語もある。特に「竹季貞借屍還魂」は主人公が他人の死体を借りて生き返るため別人の家に行った。また、「遊仙都稚川」「南纘」では元の道で戻ることを強調するのに対し、「許琛」では別の路で戻ることを強調する。

おわりに

小論は「異」の「ことなる」という最も一般的な意味から、「異界」を「現実世界と異なる空間」と定義し、再び訪ねることができない、長く滞在することができない、現実世界と時間の流れが違う、異人の誘いや導きが必要である、情景が不思議であるという五つの特徴をまとめ、この五つの特徴を異界かどうか判断する基準とし、『玄怪録』とその続書から五十八篇の異界物語を選び出した。さらに、この五十八篇の物語の中の異界を仙界・冥界・幻化空間の三種類に分けた。幻化空間は現実世界で対応する空間がある特殊な異界である。また、現実世界の人が仙界へ訪ねる時、よく仙人の家を訪ねることに対して、冥界へ訪ねる時は往々にして冥府を訪ねる。それは仙界を訪ねる物語の多くは仙人個人と付き合うが、冥界へ行く物語はほとんどは命に関する裁判に参加することと関連性がある。三種類の異界に違うところは多いが、作者はこれらの異界に対して統一の考えがある。それは異界は現実世界の並行世界であり、現実世界の人を入らせる時、現実世界の空間を覆って入口を開くことである。

また、『玄怪録』とその続書が代表する唐代小説の作者は、異界そのものより、現実世界の人と異界との関係に注目した。そのため、異界の物語は基本的に現実世界の人の異界巡遊の話である。現実世界の人が異界に行く原因は、ほとんど異人に誘われるなど外部原因であり、内部原因で異界に行く場合異人の誘いも異界に入ることができる重要な条件である。もちろん、現実世界の人も何らかの条件を備えなければならない。異界に入る途中で目を閉じることがしばしば要求される。また、現実世界と異界との境界線は曖昧で、仙界への道に対する描写は自然風景が多いが、冥界への道に対する描写は町の風景が多い。ただし、冥界の官員も神仙であるため、冥界の官員の家に訪ねる物語では、仙界と同じく綺麗な自然風景の描写が現れる。

それに対して、異界から帰る時は、現実世界の人自身の願望によって異界から出る場合が多い。つまり現実世界の人の意志は入る時より通る。ただし、異人の手伝いは依然として必要である。特に魂だけ異界に入った場合、帰る時驚かされることが多くある。異界へ旅をした現実世界の人は一般的に元の道を経て元の所へ帰ったが、別の道を通ったり、別の所へ着いたりする場合もある。

以上は『玄怪録』とその続書を通して明らかにした唐代の人の異界に対する認識である。先行研究では唐代小説中の異界物語は仏教と道教に非常に影響されたことを明らかにしたが、具体的にどこに宗教の設定を使い、どれが独創的な内容であるか、稿を改めて論じたい。

注

(1) 魯迅『中国小説史略』、人民文学出版社、一九七三年、頁七一。

(2) 『玄怪録』と『続玄怪録』の小説の所属問題を研究した論文は、王夢鷗「玄怪録及其後継作品弁略」上下（『唐人小説研究』四集、芸文出版社、一九七一年、頁一～五一）、程小銘「『玄怪録』作品帰属弁証(上)」（『貴州文史叢刊』一九九六年第三期、一九九六年五月、頁三一～三八）・「同(下)」（同第五期、同年十一月、頁四三～四七）、董乃斌「『続玄怪録』的文本分析和篇目討論」（『文史知識』二〇〇三年第七期、二〇〇三年七月、頁一七～二七）、徐志平『『続玄怪録』研究』（花木蘭文化出版社、二〇〇七年）などがあるが、小論では、最も信頼性が高いと思われる程氏説に従い、小説の所属を下記のとおりとする。

【『玄怪録』所属小説】韋氏、柳帰舜、崔書生、来君綽、曹惠、滕庭俊、元無有、顧総、周静帝、劉諷、董慎、袁洪児誇郎、張左、蕭志忠、李汭、南纘、侯遹、巴邛人、劉法師、刁俊朝、古元之、盧公渙、杜巫、崔尚、鄭望、元載、魏朋、岑順、韋協律兄、狐誦通天経（すべて三十篇）

【『続玄怪録』所属小説】杜子春、張老、裴諶、郭代公、尼妙寂、堂氏女、崔環、斉饒州、呉全素、掠剩使、開元明皇幸広陵、葉天師、許元長、王国

良、張寵奴、葉氏婦、馬僕射総、華山客、尹縦之、王煌、岑曦、李沈、蘇履霜、景生、盧頊表姨、楊敬真、辛公平、梁国武公李愬、薛中丞存誠、麒麟客、盧僕射従史、李岳州、張質、韋令公皋、鄭虢州駒夫人、薛偉、蘇州客、張庾、竇玉妻、房杜二相国、銭方義、張逢、定婚店、葉令女、駈言、木工蔡栄、梁革、李衛公靖、李紳、韋氏子、延州婦人、琴台子、唐俠、馬震（すべて五十四篇）

【『幽明録』所属小説】淳于矜（『太平広記』では『玄怪録』の物語とされている。）

【『河東記』所属小説】崔紹（『太平広記』では『玄怪録』の物語とされている。）

ただし、後の分析は四つの小説集の物語を合わせて分析するため、物語の所属は分析に影響がない。

（3）晁公武『郡斎読書志』衢本巻一三、『郡斎読書志校証』、上海古籍出版社、一九九〇年、頁五五三。

（4）『四庫全書総目』、『影印文淵閣四庫全書』第三冊、台湾商務印書館、一九八七年、頁一〇〇四。

（5）柳瀬喜代志「仙界へのまなざし――男の楽園としての異界」、『月刊しにか』第八―三期、一九九七年三月、頁五一。

（6）先坊幸子「六朝の「異界説話」」、『中国中世文学研究』第三十六期、一九九九年七月、頁二三。

（7）原田二郎「異界への道――中国小説の場合」、『経済志林』第七十八―三期、二〇一一年、頁九〇。

（8）「所謂異境、是指人類想像中的異類（神仙鬼怪等）活動的世界、……不過、人間与異境並非地理性概念、各自没有厳格的界限、甚至存在交融的情況」。張玉蓮「古代小説中的異境構建」、『蘭州学刊』二〇一二年第七期、二〇一二年七月、頁九六。

（9）「「仙境」是相対人境的一種人外世界、是一種神聖的空間、不同於凡俗世界」。岳之淵「重復書写与唐代凡人遊歴仙境故事類型的形成」、西南大学修士論文、二〇一四年、頁二。

（10）「仙府之地多位於深不見底的水中或是隠匿於山・洞之内、鮮少有凡人渉足或是闖入、只待「有縁人」来此時才処於開放狀態」。李佩玉「裴鉶『伝奇』空間叙事研究」、天津師範大学修士論文、二〇一七年、頁一一。

（11）『玄怪録・続玄怪録』、中華書局、二〇〇六年、頁一七七。以下は『玄・続』と略称する。

（12）『獨異志・宣室志』、中華書局、一九八三年、宣室志部分頁八七。以下は『宣』と略称する。

（13）『太平広記』、人民文学出版社、一九五九年、頁一五五。以下は『広記』と略称する。

（14）例えば郭一葦・田峰「唐人異境故事中的時間与空間書写」（『文化学刊』二〇二三年第十二期、二〇二三年十二月、頁二三四）、陳嘉玥「中国仙境淹留型伝説的空間構建研究」（華中師範大学修士論文、二〇二〇年、頁六六～六九）。

（15）『宣』頁一六四。

（16）「目前的研究、大部分学者従題材切入、将故事類型分為仙界与冥界両類」。「唐人異境故事中的時間与空間書写」、頁二三二。

（17）劉慧平「唐人小説遊歴異境故事研究」、西北大学修士論文、二〇一六年。

（18）『広記』頁三〇六七。

（19）「在唐人小説中、還有一個与現実世界時刻発生関係的超現実世界、這個憑経験与想象創造出来的世界与現実世界不但平行地存在着、而且両者之間不断地進行着交通与転換、由此共同構成了一個完整的唐代世俗世界」。楊為剛「唐代都市小説叙事的時間与空間――以街鼓制度為中心」、『唐研究』第十五巻、頁一二二。

（20）伊藤令子「唐代伝奇「枕中記」の〝夢〟と〝異界〟を巡る物語認識の変容――『太平広記』の分類を手がかりに――」、『中国文学報』第九十期、二〇一八年四月、頁八八～九〇。

（21）『玄・続』頁七一。

（22）『広記』頁三〇六九。

（23）『宣』頁五二

（24）玉清宮は道教の三清境の一つ、元始天尊がいる玉清の宮殿である。

（25）『宣』頁三三。

（26）『玄・続』頁一八七。

（27）『宣』頁七九～八〇。

（28）邵穎涛「冥界与唐代叙事文学研究」、南開大学博士論文、二〇一〇年、頁一六五～一七四。

（29）袋に魂を入れて冥界に連れて行かれることは、楊金川「六朝隋唐冥審小説研究」（南京大学修士論文、二〇一二年、頁八七）で言及されたことがある。

（30）例えば「冥界与唐代叙事文学研究」（頁一七四～一八二）、韓紅「佛教信仰与唐五代入冥故事研究」（蘭州大学博士論文、二〇一九年、頁六一～六四）。

（31）冥界は地下にあるという思想は、唐代以前にすでに現れ、唐代小説でも

時々言及される。ただし、地下と明言する冥界巡遊譚では、現実世界の人はどのように冥界へ行ったのか詳しく描写していない。そのため、地下冥界に行く時に水平移動したか、垂直移動したかわからない。しかし、冥界は現実世界の並行世界だという思想から考えると、水平移動して「地下」冥界に入ったとは解釈できる。

(32) この点について、邵穎涛は「多くは数里の道のり以内（多在数里行程之内）」（「冥界与唐代叙事文学研究」、頁一六三）と述べている。それに対して劉成竜は「現世から冥界への移動を比較的長距離と認識する」（「日中再生説話比較研究―現世と冥界の往復を中心として―」、『現代社会文化研究』第六十三期、二〇一六年十二月、頁三）と述べている。

(33) 周俐「仙境的通道――古代遇仙小説一个因子的分析」（淮陰師専学報第五十四期、一九九二年十二月、頁二九～三三）、「古代遇仙小説仙境通道的特征」（淮陰師専学報第五十八期、一九九三年十月、頁三五～三八）で詳しく論じた。

(34) 「中国仙境淹留型伝説的空間構建研究」、頁三七。

(35) 「唐人異境故事中的時間与空間書写」、頁二三四。

(36) 『宣』頁一八四。

(37) 『宣』頁一八五。

(38) 「日中再生説話比較研究―現世と冥界の往復を中心として―」、頁五～八。

（本学言語教育センター授業担当講師）

附表一：異界へ行く原因

	仙界	冥界	幻化空間
異人に誘われる	張左 麒麟客 李紳 楊敬真 消麺虫 玉清三宝 駱玄素符術 遊仙都稚川	袁洪児誇郎 南纘 蘇履霜 景生 蕭洞玄 婁師徳 張汶死而復生	張寵奴 鄭徳楙鬼婚
異人に手伝わせられる	古元之 蘇州客 杜子春	董慎 斉饒州 金天王	
異人に説教される	裴諶	崔環	
裁判を受ける		呉全素 王国良 張質 崔紹 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐	
任命される		馬僕射総 許琛 冊立閻波羅王使 地府巡査使	
異人に遊ばれる			王先生道術
異人を見送る	崔書生		
異人／異人の家を訪ねようとする	劉法師 張老		
異人に願いがある	李汭		唐俔
泊まる所を探す	李衛公靖	竇玉妻	来君綽 滕庭俊 鄭望
乗る馬を探す	許貞狐婚		
死亡		盧頊表姨 韋氏子 盧従事 竹季貞借屍還魂 董観死而復生 幽顕之恨 鋳佛像得復生	

附表二：異界へ行く条件

	仙界	冥界	幻化空間
異人に呼ばれる		董慎 崔環 呉全素 張質 崔紹 金天王 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 地府巡査使	
異人／使者に導かれる	崔書生 李汭 劉法師 張左 柳帰舜 古元之 杜子春 張老 麒麟客 李紳 楊敬真 消麺虫 駱玄素符術 遊仙都稚川	袁洪児誇郎 董慎 南纘 崔環 斉饒州 呉全素 王国良 馬僕射総 張質 景生 蕭洞玄 許琛 崔紹 金天王 婁師徳 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 地府巡査使 張汶死而復生 董観死而復生 幽顕之恨 鋳佛像得復生	張寵奴 鄭徳楙鬼婚
所在地／行く方法を教えてもらう	李汭 蘇州客 張老 裴諶 遊仙都稚川		
入る許可をもらう	劉法師 李衛公靖 許貞狐婚	竇玉妻	張寵奴
儀式をする		斉饒州	

異人と知り合う	劉法師 柳帰舜 蘇州客 張老 麒麟客 裴諶 消麺虫	袁洪児誇郎 南纘 崔環 馬僕射総	鄭望 王先生道術
試練を完成する	杜子春	斉饒州	
才能／素質を備える	張左 李紳 楊敬真 遊仙都稚川	袁洪児誇郎 董慎 金天王 地府巡査使	滕庭俊
寝る		呉全素 馬僕射総 董観死而復生 幽顕之恨 鋳佛像得復生	
病		崔環 王国良 崔紹 婁師徳 鋳佛像得復生	
夜／夕暮れ	李衛公靖 李紳 許貞狐婚	竇玉妻 呉全素 張質 許琛 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 董観死而復生	来君綽 滕庭俊 鄭望

附表三：異界へ行く方法

	仙界	冥界	幻化空間
馬に乗る		袁洪児誇郎 南纘 馬僕射総 張質 冊立閻波羅王使	鄭徳楙鬼婚
車に乗る		景生	
虎に乗る	麒麟客		
鶴に乗る	楊敬真		
簡に乗る	李紳		
竹杖に乗る	古元之		
飛ぶ	古元之 楊敬真	李敏求	
亭に登る	玉清三宝		
耳に入る	張左		
袋に入れられる	遊仙都稚川	董慎	
袋を頭に被られる		王国良	
目を覆われる／閉じられる	蘇州客 李紳 遊仙都稚川	董慎	
夢		馬僕射総 婁師徳 韓氏前生冤讐 幽顕之恨 鋳佛像得復生	
死	古元之	王国良 景生 崔紹 許琛 開尹真人石函得罪 張汶死而復生	
橋を叩く	蘇州客		
杖で地に描く			王先生道術

附表四：異界へ行く通路

	仙界	冥界	幻化空間
方向			
東	楊敬真	韓氏前生冤讐	
西		董観死而復生 幽顕之恨	
南	麒麟客 玉清三宝		
北		斉饒州 呉全素 馬僕射総 張質 許琛	
南西	古元之		
北東		冊立閻波羅王使	
距離			
百余歩		張質	
二百歩		呉全素	
数百歩		崔環	

数里	李汭 呂群 石室銘文 許貞狐婚	婁師徳 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 地府巡査使	
三四五里	柳帰舜		張寵奴
十里	玉清三宝	袁洪児誇郎	
十余里	張老 駱玄素符術	董観死而復生	
三二十里	劉法師		
四十余里	杜子春		
五十里		開尹真人石函得罪	
五十里許		崔紹	
六七十里		許琛	
数百里	麒麟客	斉饒州 馬僕射総 幽顕之恨 鋳佛像得復生	
(時間)			
須臾 / 奄		蕭洞玄	鄭徳楙鬼婚
良久		李敏求	
途中の景色			
山	李汭 劉法師 杜子春 張老 麒麟客 石室銘文 駱玄素符術 遊仙都稚川		
水	柳帰舜 張老 遊仙都稚川		
谷	崔書生 劉法師 麒麟客		
切岸	劉法師		
洞窟	遊仙都稚川		
沢		幽顕之恨	
原野		李敏求 幽顕之恨 鋳佛像得復生	
植物	劉法師		
巨木	遊仙都稚川		
林	石室銘文	張質	
荊棘		許琛	
草		董観死而復生	
城門 / 城		呉全素 馬僕射総 董観死而復生	
橋	蘇州客		
異界への入口の所在地			
華山	劉法師 杜子春 麒麟客		
天壇山	張老		
青城山	李汭		
霍山	李衛公靖		
羅浮山	李紳		
玉山	遊仙都稚川		
邏谷	崔書生		
君山島	柳帰舜		
湖	蘇州客		
海	消麺虫		
鄭氏亭	玉清三宝		
広陵郊外	裴諶		
華岳廟		金天王	
洛城			唐俔
道側			来君綽 滕庭俊 鄭望

附表五：異界から帰る原因

	仙界	冥界	幻化空間
帰りたがる	張左 李紳 楊敬真	南纘 呉全素 竹季貞借屍還魂 冊立閻波羅王使	
現実世界の人と用事がある		韋氏子 盧従事	
用事が失敗する	杜子春 李衛公靖	馬僕射総 地府巡査使	
異人になれない	劉法師 遊仙都稚川		

命がある		王国良 盧頊表姨 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐	
来る / 長くいるべきではない	張老	竇玉妻 蘇履霜 景生 李敏求 張汶死而復生	鄭徳楙鬼婚
異人と一緒に別の所に行くことができない		袁洪児誇郎	
異人と別れる	許貞狐婚		来君綽 鄭望 唐倹
帰ることを要求される	崔書生 裴諶 駱玄素符術		
誤って呼ばれた		張質 許琛	
異人に救われる		董観死而復生 鋳佛像得復生	張寵奴
人に捜される	柳帰舜		滕庭俊
用事が終わる	李汭 古元之 蘇州客 麒麟客 玉清三宝	董慎 崔環 斉饒州 蕭洞玄 崔紹 金天王	王先生道術
朝になる		婁師徳	

附表六：異界から帰る条件

	仙界	冥界	幻化空間
異人 / 使者に導かれる	李汭 劉法師 張老 麒麟客 楊敬真 駱玄素符術	董慎 南纘 崔環 斉饒州 呉全素 馬僕射総 張質 蘇履霜 李敏求 許琛 崔紹 竹季貞借屍還魂 開尹真人石函得罪 地府巡査使 董観死而復生 鋳佛像得復生	
道を教えてもらう	杜子春	幽顕之恨	
帰る許可をもらう	楊敬真	呉全素 王国良 張質 景生 許琛 盧従事 竹季貞借屍還魂 冊立閻波羅王使 地府巡査使 張汶死而復生	
異人に手伝われる	柳帰舜	盧頊表姨 蘇履霜 幽顕之恨	張寵奴
異人に賄賂する		呉全素	

附表七：異界から帰る方法

	仙界	冥界	幻化空間
目を覆われる / 閉じられる	柳帰舜 李紳	董慎	
袋に入れられる		董慎	
箒で庭を掃く			王先生道術
耳から出る	張左		
眠る	古元之	冊立閻波羅王使	
這う		王国良	張寵奴

馬に乗る		馬僕射総 李敏求	鄭徳楙鬼婚
麒麟に乗る	麒麟客		
飛ぶ	柳帰舜		
落ちる	張左 柳帰舜 李紳 楊敬真	董慎 斉饒州 馬僕射総 張質 李敏求	
名前を／大声で呼ばれる		袁洪児誇郎 崔環 馬僕射総 鋳佛像得復生	滕庭俊
推される		李敏求	
水に浴びられる		董観死而復生	
目覚める／蘇生する	古元之	崔環 斉饒州 呉全素 王国良 馬僕射総 盧頊表姨 張質 蘇履霜 景生 李敏求 許琛 崔紹 婁師徳 竹季貞借屍還魂 開尹真人石函得罪 韓氏前生冤讐 冊立閻波羅王使 地府巡査使 張汶死而復生 董観死而復生 幽顕之恨 鋳佛像得復生	
生まれ変わる		蕭洞玄 盧従事	

附表八：異界から帰る通路

	仙界	冥界	幻化空間
方向			
南		斉饒州 馬僕射総	
西	楊敬真		
南東		董観死而復生	
距離			
数歩	蘇州客 李衛公靖		
数里		韓氏前生冤讐 董観死而復生	
数十里		鋳佛像得復生	
百余里		張汶死而復生	
（時間）			
須臾、倏忽		崔環	鄭徳楙鬼婚
数宿		王国良	
風景			
町		崔環 呉全素	
目的地			
家／住所	張左 古元之 張老 麒麟客 楊敬真	董慎 崔環 呉全素 王国良 馬僕射総 韋氏子 李敏求 崔紹 開尹真人石函得罪 冊立閻波羅王使	
別人の家		斉饒州 蕭洞玄 盧従事 竹季貞借屍還魂	王先生道術
寺		董観死而復生	
道観	劉法師		
谷	崔書生		
県南	駱玄素符術		
店	李紳		
船	柳帰舜		
橋	蘇州客		
道		南纘	
林		張質	

原地	崔書生 劉法師 張左 柳帰舜 古元之 蘇州客 張老 麒麟客	董慎 南纘 崔環 斉饒州 呉全素 王国良 馬僕射総 張質 李敏求 崔紹 開尹真人石函得罪 冊立閻波羅王使 董観死而復生	王先生道術
原路	遊仙都稚川	南纘	
別路		許琛	

附表九：主人公が異界にいる間現実世界が過ごした時間

	仙界	冥界	幻化空間
数日	古元之	景生 張汶死而復生	
三日	柳帰舜	開尹真人石函得罪 幽顕之恨	
五日		鋳佛像得復生	
七日	麒麟客	崔環 張質 崔紹	
十余日		董慎	
七八年	張左		